

◆ Mさん 自叙伝 2025 年時に 91 歳

目次

第一章 祖先の記憶と家のルーツ

- ・ 赤松則村(円心)家の末裔としての家系
 - ・ 武家から実業へ転じた明治維新の転換点
 - ・ 関西の銀山での労働
 - ・ 親族の移住:高崎へ、そして足尾銅山へ
 - ・ 導火線事業の成功と爆発事故による祖父母の死
 - ・ 父が選んだ「銃製造」の道
 - ・ 「世につれ、人につれ」― 苦難の中で生き方を変え続けた家の歴史
-

第二章 戦火の少年時代 ― 疎開と空襲と焼け跡

- ・ 昭和初期、金型業の産声
 - ・ 小学三年生で迎えた戦争の暗雲
 - ・ 千葉への縁故疎開、東京に残る父
 - ・ 空襲が工場を焼き尽くす
 - ・ 昭和20年12月31日、焼け野原の霜の白さ
 - ・ 母の苦労と、父の「頑張ろう」という言葉
 - ・ これが後の「人生の原点」となる
-

第三章 焼け跡からの再起 ― 少年が背負った家族の未来

- ・ 終戦からの復興、父の再起への決意

- ・ 交通事故で倒れた父を支える少年としての役割
 - ・ 「悲運を子にせじ」という親の思いが胸に刻まれる
 - ・ 夜警、町会の手伝い…地域の人々と支え合う日々
 - ・ 荒川区の戦後の姿：暗い夜道と人の絆
 - ・ ものづくり精神の芽生え
-

第四章 青春と修業 ― 技術を学び、人生を選ぶ

- ・ 機械加工技術を学ぶ青年期
 - ・ 長男としての責任と家業への意識
 - ・ 「恋愛か見合いか」―迷いながらも選んだ人生
 - ・ 「結婚は事業の基」
 - ・ 群馬の奥様の家族との縁
 - ・ 荒川区小台・西尾久での暮らしの始まり
-

第五章 成長の時代 ― 高度経済成長と金型の進化

- ・ 金型が日本の大量生産を支えた時代
 - ・ 工場の拡張、精度向上への挑戦
 - ・ 海外視察：サンフランシスコからアメリカ 4 週間の旅
 - ・ 世界に触れたことで広がった視野
 - ・ 家族旅行 ― ハワイ、グランドキャニオン、ラスベガス
 - ・ 社員寮兼自社ビルの建設と苦労
-

第六章 責任と信頼 ― 経営者としての覚悟

- ・ 子育てと取引先への信用構築
 - ・ 徹夜作業と夜明けの街、助手席で眠る妻
 - ・ 苦勞を知らぬ子どもたちへ「背中で教える」
 - ・ 苦情対応、舍人しんすい公園への工場移転
 - ・ 中小企業の現実と経営の重さ
-

第七章 熟成の時代 ― 家族の絆と社会への奉仕

- ・ 親族旅行で深まる家族の結束
 - ・ ロータークラブへの入会（60 歳）
 - ・ 奉仕活動と国際大会で得た経験
 - ・ インドネシア視察での迷子事件
 - ・ 「男は世に出れば七人の敵」の実感
 - ・ 地域活動「荒川をよくする会」への参加
-

第八章 技術の魂 ― 信頼に応える開発と特許

- ・ 接着不良で危険を抱えた製品改良の依頼
- ・ 「一体成形」という至難の技への挑戦
- ・ 社員とともに達成した“成せば成る”の瞬間
- ・ 経産省製造業局長賞受賞
- ・ ファスクバーナー小松で採用された画期的なファン
- ・ TOTO・東芝・日産・レクサス・キャデラックへの挑戦

- ・「義侠心」が技術を動かす
-

第九章 創造と継承 ― 厳しい市場で生き残る工夫

- ・ EV 時代・国際競争時代の不安
 - ・ プラスチック製品の変遷と海外製品との競争
 - ・ 「転んでも只では起きぬ」経営者の心
 - ・ 新製品技術大賞(荒川区長表彰)受賞
 - ・ 三代目への継承とその難しさ
 - ・ 樹脂リサイクルという未来への責任
-

第十章 米寿を迎えて ― 人は世につれ、世は人につれ

- ・ 妻の内助の功と家族の絆
 - ・ 四人の子どもの誠実さが家系の柱となる
 - ・ 孫の可愛さ、晩年の穏やかな喜び
 - ・ 「灯火を絶やさず歩む」人生観
 - ・ 90 歳まで働き続けた姿勢
 - ・ 「幸福は人間の力で築くもの」
-

終章 後世への手紙

- ・ 家業は人を育て、人は家業を育てる
- ・ 技術と誠意を未来へ

- 「人は世につれ、世は人につれ」
 - 変わる時代に、変わらぬ心で生きよ

第一章 祖先の記憶と家のルーツ

—— 明治の息吹と、ものづくりの血脈

私の家のルーツを語るには、時代を明治の頃まで遡らねばならない。父は明治三十六年に生まれ、家系はもとは武家の流れを汲み、赤松則村(円心)の末裔であると伝わってきた。武士の時代が終わりを迎え、新しい日本が形づくられていくその激動の中で、先祖たちは武家の生き方を捨て、鉱山関係の仕事へと舵を切った。

関西の銀山で暮らした時代がある。鉱脈を掘り当て、銀を取り出す作業は過酷で、しかし誇りがあったという。姫路近くの山あいで黙々と働くその姿は、私が生まれるずっと前の話であるにもかかわらず、家族の語りの中で鮮やかに残っている。

時代が移り、親族は関東へと移った。群馬・高崎に腰を落ち着け、その後、足尾銅山へ関わるようになった。明治から大正にかけて、足尾は巨大な銅山として国を支えていた。そこで我が家は銅線や導火線の事業に携わり、一時は勢いのある商売として栄えた。

だが「人は世につれ、世は人につれ」。好調な事業も永くは続かなかった。導火線の爆発事故で、父は幼くして両親を失った。姉とともに、突然に家族のぬくもりを奪われたのである。父の少年時代に刻まれたその悲しみは、やがて私が生きる時代にも響く“家の記憶”として継がれていった。

家業の縁か、父は火薬を扱う猟銃の製鉄所に勤めるようになった。関東の山で客とともに試し撃ちを行うこともあったという。しかし、幼き日に家族を奪った「火薬」と向き合うその仕事は、父にとってはいつも胸の奥に苦い影を落としていたらしい。

けれども、それでも生きていくしかなかった。時代と環境が人を流し、人の思いがまた時代を変えていく。父の歩みは、そんな「世と人との相互作用」の象徴のようであった。

やがて父は東京へ出て、下谷に籍を移した。結婚の折、戸籍をたどってみると、家系は地方と東京を行き来し、鉱山、火薬、金属といった産業に関わりながら、複雑に枝分かれしていた。私が後に金型・樹脂といった“ものづくり”の道に進むことになるのは、こうした家の歴史が背後にあったからかもしれない。

父は次の時代を予感していたのだろう。猟銃の需要が陰っていく中で、「銃では家族を食わせていけない」と悟り、思い切ってプラスチック製品の製造へと転身した。これは昭和へ入り、まだ日本が戦争の影を色濃く帯びる前のことだ。

明治の武家から始まり、鉱山、銅山、火薬、猟銃、そしてプラスチックへ——。
一見すると脈絡のない変遷に見えるが、本質はいつも「ものづくり」であった。
それは時代に翻弄されながらも、誠実に生き抜こうとする我が家の不変の気質であり、私自身の人生を形作る礎となった。

こうして我が家は、時代の大きな波を乗り越えながら東京へと根を下ろし、やがて荒川の地で新たな家族の物語を紡ぎはじめることになる。それは、戦争へ、疎開へ、焼け跡からの再出発へとつながり、私自身の人生の舞台が動き出す序章でもあった。

第二章 戦火の少年時代 — 疎開と空襲と焼け跡

1. 昭和初期、金型業の産声

昭和の初め、日本は急速な産業発展と戦争の影が交錯する複雑な時代だった。そんな中、父は猟銃からプラスチックへと時代の流れを読み取り、「金型」という新たな領域に足を踏み入れた。

金型という仕事は、当時はまだ一般にはほとんど知られていなかったが、産業の裏側を支える重要な技術だった。父は持ち前の器用さと努力で、少しずつ取引先を増やし、家の中に響く鉄を削る音は、いつしか我が家の生活音として溶け込んでいった。

しかし、世の中は不安定だった。外では軍靴の足音が近づき、物資も徐々に不足し始める。

それでも父は黙々と機械に向かい、家族を養うための新しい道を切り開いていた。

その背中から、私は「働く」ということの意味を、まだ幼いながらに感じ取っていた。

2. 小学三年生で迎えた戦争の暗雲

私が小学三年生になった頃、戦況は次第に深刻さを増していた。学校にはいつも緊張感が漂い、先生の表情にも不安の影が浮かぶようになっていた。

授業中、防空訓練のサイレンが鳴り響くと、皆で机の下にもぐったり、防空壕へ駆け込んだりした。子どもながらに、これは只事ではない、と感じていた。

家に帰ると、父も母もその話題を避けがちだった。しかし、夕食の席で交わされるひそやかな話し声から、世の中が大きく揺れ動いていることだけは伝わってきた。

童話を読む楽しみよりも、サイレンの音が心に刻まれる。
そんな時代を、私は子どもとして生きていた。

3. 千葉への縁故疎開、東京に残る父

戦況がさらに悪化すると、政府から疎開が指示されるようになった。
学校からは「集団疎開」と「縁故疎開」を選ぶよう言われた。

母は迷った末、千葉にある自分の実家へ「縁故疎開」することを決めた。
私たち子どもは母と一緒に千葉へ向かい、慣れない農村生活を始めた。

しかし、父は東京に残った。
軍需品の部品を作る金型職人である父の仕事は、疎開するわけにはいかなかったのだ。

千葉の母の実家では、育てた野菜で食卓を繋ぎ、雨風をしのげるだけでありがたい生活だった。

だが、何より心配だったのは、東京で空襲の危険にさらされる父のことだった。
母は東京との往復を何度も繰り返し、そのたびに疲れ切った顔で戻ってきた。

疎開先の夜、薄暗い電灯の下で、私は母の背中を見ながら思った。

——「父は大丈夫だろうか。」

この幼い不安は、今でも心に残っている。

4. 空襲が工場を焼き尽くす

私たちが千葉に身を寄せていた頃、東京への空襲は激しさを増していった。ついにあの日、父の作業場が火の海となった。

後に父から聞かされたのは、工場が炎に包まれ、金型も機械もすべて焼け落ちてしまったということだった。

父は、焼け残った部材を手に持ち、放心したように立ち尽くしたという。家族を守るために積み重ねてきた仕事が、一瞬で灰になった。

母はその知らせを聞き、膝から崩れ落ちた。私も胸の奥で何かが崩れ落ちるような感覚を覚えた。

「父の工場が燃えた」
小学生の私にとって、その言葉は“家族の未来そのものが崩れた”ような衝撃だった。

5. 昭和 20 年 12 月 31 日、焼け野原の霜の白さ

終戦から数か月――
昭和二十年十二月三十一日。
ようやく千葉から東京へ戻ることになった。

夕方に到着した荒川の町は、まるで別世界だった。
見渡すかぎり焼け跡で、建物は黒く焦げ、足元には瓦礫が積もっていた。

その光景をよりいっそう際立たせたのは、あたり一面に降りた“霜”であった。
焼け跡の黒の上に、霜の白が薄く重なり、まるで墨絵のような世界が広がっていた。

黒と白。
破壊と静寂。
絶望と、それでも消えない希望。

この光景は、今でも目に焼き付いている。

6. 母の苦労と、父の「頑張ろう」という言葉

東京へ戻ったその晩、母は涙をこらえながら、私たち兄弟に言った。

「大変だったけど、みんなでまた頑張っていこう。」

戦争の時代、母は千葉と東京を往復し、父の無事を確認しながら疎開先の家族も守った。

その苦労は計り知れない。

一方、父は焼け跡の前で、短くしかし確かな声で言った。

「よし。ここからやり直す。」

その言葉には、悲しみも、迷いも、諦めもなかった。
ただ、家族を守るために“前に進む”という覚悟だけがあった。

私は、その父の背中を見て、人生で初めて「強さ」というものを感じた。

7. これが後の「人生の原点」となる

疎開、空襲、焼け跡、そして再出発——

この一連の出来事は、口に出す以上に重く、私の心に深く刻み込まれた。

後になって振り返ると、
この時期が私の「人生の原点」であったように思う。

- ・どんな状況でも諦めない父の姿
- ・家族を支えるために動き続けた母の強さ
- ・焼け野原に降りた霜の白さが象徴する“静かな希望”

これらすべてが、のちに私が困難に立ち向かう時の支えとなってくれた。

人は世につれ、世は人につれ。

時代は人を試すが、人の思いがまた時代を切り開く。

少年時代に見た光景と心に刻まれた言葉は、
その後の長い人生における道しるべとなっていった。

第三章 焼け跡からの再起 ― 少年が 背負った家族の未来

1. 終戦からの復興、父の再起への決意

昭和二十年の終戦後、日本中が疲弊していた。

荒川の町も例外ではなく、焼けた建物、崩れた塀、焦げ跡の匂いがただよう中で
人々は生活を立て直そうとしていた。

その中で、父はゆっくりと、しかし確実に再起の一步を踏み出した。

工場は焼け落ち、機械はすべて失われた。

だが、それが父の心を折ることはなかった。

焼け跡の中に腰を下ろし、父は工具の残骸を拾い上げながら言った。

「ここからまた始める。この町で、もう一度。」

その言葉は、少年だった私の胸に深く響いた。

父の背中には、悲しみではなく、未来を見つめる強い光があった。

周囲の大人たちが失意に沈む中でも、父は動き続けた。
壊れた工場を片付け、知人に頼んで機械の一部を借り、小さな作業台から仕事を再開した。

焼け落ちた町の中に、父の小さな工場だけが、静かに音を取り戻し始めていた。

2. 交通事故で倒れた父を支える少年としての役割

しかし、再起の道は平坦ではなかった。
ある日、父が交通事故に遭い、重傷を負ってしまったのである。

戦争を生き抜いた父が、今度は事故で動けなくなるとは、誰も予想しなかった。
布団に横たわる父は、痛みに顔をゆがめながらも、仕事のことが気がかりで仕方ない様子だった。

その代わりを務めるのは——当時、中学三年生だった私だった。

父は横になりながら、私に丁寧に指示を出した。

「その金属は、もっと丁寧に削るんだ」
「この寸法は間違えるなよ」
「焦るな。ゆっくりやれ」

私は父の手となり、足となった。
機械の音に混じって、父の声が工場に響く。
その声を頼りに、私は部品を削り、金型を仕上げていった。

慣れない仕事に手が震えることもあったが、
父の指示を聞き逃すまいと心を張りつめていた。

少年だった私は、この頃から「家族の柱」としての責任を背負い始めていた。

3. 「悲運を子にせじ」という親の思いが胸に刻まれる

父は自身の幼少期、導火線の爆発事故で両親を失った。
その悲しみは、生涯消えることはなかった。

だからこそ父は——
「自分の悲運だけは、子どもたちには背負わせたくない」
その思いを強く持っていた。

事故で動けなくなっても、父は決して弱音を吐かなかった。
私には常に「仕事は大変でも、人生は諦めるな」と教え続けた。

少年の私は、その言葉の深さを完全には理解できなかった。
しかし、父の思いは確かに私の胸に刻まれ、
後に自分が困難に立ち向かう際の支えとなった。

4. 夜警、町会の手伝い…地域の人々と支え合う日々

仕事の合間、私は地域の夜警にも参加した。
戦後まもない荒川区は夜になると真っ暗で、明かりは街灯がぼつぼつと灯る程度だった。

そのわずかな光の下、私たち町会の青年は交代で夜道を見回った。

防犯のためでもあり、地域の連帯を保つためでもあった。

「おーい、今日はこっちの通り頼むよ」
先輩たちの声に励まされながら、私は夜の町を歩いた。

幼い頃から知る顔ぶれ、戦争をくぐり抜けた人々。
皆、互いに支え合いながら生きていた。

苦しい時代だったが、この「人のつながり」は強く、美しかった。
後に続く私の人生観にも、この時の体験が影響を与えたことは間違いない。

5. 荒川区の戦後の姿：暗い夜道と人の絆

当時の荒川区は、昼はまだしも、夜はとても静かで暗かった。
工場の多い地域だったため、昼間は機械の音や作業員の声でにぎわうが、
夜になるとほとんどの人が家に閉じこもり、道には人影がなくなる。

しかしその暗さの中にこそ、人々の絆があった。

工場仲間、町会の人々、近所の家族——
みな、「誰かが困っていれば助ける」という精神が当たり前のように根付いていた。

その空気に包まれながら育った私は、
「人は一人では生きられない」
という事実を、自然と受け止めるようになっていた。

6. ものづくり精神の芽生え

父の事故をきっかけに、私は機械に触れる時間が増えた。
最初は父の代役として、やむなく作業を続けていたが、次第に私は金属の感触や工
具の音に魅了されていった。

金属を削るときに生じる微かな震動。
寸法がぴたりと合ったときの気持ちよさ。
仕上がった部品を手にとった時の達成感。

それらは、戦後の混乱の中で得た、少年にとっての小さな喜びだった。

父の背中を見ながら学んだ技術は、
やがて私自身の「ものづくり精神」として育っていく。

焼け跡からの再起を支えたのは、父の意志と母の強さ、そして地域の人々の支えだ
った。

そしてもうひとつ——
幼い私の心の奥に芽生えた、“ものづくりへの情熱”だった。

第四章 青春と修業 ― 技術を学び、人生を選ぶ

1. 機械加工技術を学ぶ青年期

戦後の混乱の中で少年期を過ごした私は、やがて青年となり、本格的に“技術”と向き合う時期を迎えた。

工場にあふれる金属の匂い、回転するスピンドルの音、削られた切粉が跳ねる光——それらすべてが、私にとっては生活の一部であり、成長の糧であった。

父の事故をきっかけに触れ始めた機械加工の世界。その世界は、単なる「家業の手伝い」から、「自分の手で未来をつくるための仕事」へと変わっていった。

旋盤の刃物ひとつ、測定器の扱いひとつにも奥深さがある。

10 分の 1 ミリ、100 分の 1 ミリの精度の違いが製品の命運を左右する。

金属は嘘をつかない。削りすぎれば戻らないし、寸法を誤れば最初からやり直した。

だからこそ、技術者は慎重でなければならない。

そして同時に、思い切りも必要だ。

私はこの頃、技術というものが「人間の性格を映す鏡」のように思っていた。

仕事をしていく中で、自分自身の未熟さに悔し涙を流したこともあるが、技を覚えるたびに確かな自信が心に芽生えていった。

青年期の私は、機械と向き合いながら、確かに成長していった。

2. 長男としての責任と家業への意識

家には三人の兄弟と妹がいた。私は長男だった。

当時の価値観では、長男は家業を継ぐものとされ、それが家族を守る道でもあった。

しかし、戦後の混乱期に家業を継ぐというのは、簡単なことではなかった。

経済は不安定で、材料も設備も不足していた。

それでも父は「技術は必ず人を助ける」と言い続けた。

私はその言葉を信じて、技術を身につける決意を固めた。

父の背中を見て育ち、事故のあの日には父の手足となり、焼け跡の工場を支えた。

その経験が私に“責任”という言葉に深く刻みこんでいた。

「家族を守る」

この一点が、青年期の私の人生の中心にあった。

3. 「恋愛か見合いか」—迷いながらも選んだ人生

仕事を覚え、青年としての自覚が芽生え始めると、自然と将来の家庭についても考えるようになった。

当時の時代背景では、恋愛結婚が少しずつ増えてはいたが、まだまだ見合いが一般的だった。

私自身も、恋愛の甘さに憧れを抱く一方で、長男として家業と家庭を両立できるかどうか不安もあった。

何度も心の中で迷ったものだ。

恋愛の自由を選ぶのか、見合いで安定を選ぶのか。

人生の先輩たちは、こう助言してくれた。

「結婚は遊びじゃない。家を築くんだ。」

「相手の家族ともつながることだ。そこが大事だ。」

私もまた、家族を守る責任を考え、

“自分一人の気持ち”ではなく“家の未来”を見据えた判断を迫られた。

そして、私は見合いという形で、人生の伴侶と出会うことになる。

4. 「結婚は事業の基」

結婚を決める際、ある人に言われた言葉が今でも心に残っている。

「結婚は事業の基(もと)。仕事をうまくいかせたいなら、家庭を大事にしろ。」

その言葉を、私は胸に刻んだ。

家庭が落ち着いていれば、仕事にも集中できる。

妻が支えてくれれば、困難も乗り越えられる。

その逆もまた然りである。

私は結婚を通じて、

“家族という船を作ることが、人生最大の事業である”

という意味を理解するようになった。

見合いで出会った妻は、明るく、芯の強い女性だった。

その笑顔は、戦後の疲れを抱えた私の心に、あたたかな灯火をともしてくれた。

5. 群馬の奥様の家族との縁

妻の実家は群馬にあり、農家として長く土地とともに暮らしてきた家だった。

群馬へ行くと、山の匂い、畑の土の温もり、人々の素朴な優しさに触れた。

妻の家族は、みな働き者で、まっすぐな人ばかりだった。

「うちの娘をよろしく頼みますね」

そう言われた時、私は家族の重みと温もりを同時に感じた。

群馬は、私にとって“第二の故郷”のような場所となっていく。

その縁が、のちに家族旅行や親戚付き合いを通じてさらに深まっていく。

6. 荒川区小台・西尾久での暮らしの始まり

結婚後、私たち夫婦は荒川区小台、西尾久で新しい生活を始めた。
この地域は工場が多く、下町ならではの温かい人情があった。

昼間は工場の音がにぎやかに響き、夜になると静けさがゆっくりと広がる。
そんな環境の中で、私たちの家族としての一歩が始まった。

夫婦としての生活、仕事との両立、地域との付き合い。
すべてが新しく、そしてどれもが大切だった。

狭いながらも温かい家で、妻と共に未来を語りながら、
私は“家を持つ”ということの意味を知っていった。

青年は、やがて夫となり、そして家族の中心へと育っていく——
その始まりが、この荒川区での暮らしだった。

第五章 成長の時代 — 高度経済成長 と金型の進化

1. 金型が日本の大量生産を支えた時代

昭和三十年代から四十年代、日本は高度経済成長の真っただ中にあった。
街には新しい製品が次々と登場し、家電、自動車、日用品——あらゆる工業製品が
国中に広がり始めた。

その根幹を支えていたのが「金型」である。
精密な金型があるからこそ、同じ形の部品を大量に、正確に作ることができる。
言うなれば、金型は“ものづくりの母体”であり、工業化の土台そのものだった。

父の代から始まった我が家の金型業は、この時代に大きく成長するチャンスを迎える。

私自身も、技術者として、そして家業を継ぐ者として、この波に向き合うことになった。

朝から晩まで機械が動き続ける工場の中で、私は金型という仕事が“日本の発展そのもの”に繋がっていることを、誇りと共に実感していた。

2. 工場の拡張、精度向上への挑戦

仕事が増えると、自然と工場を拡張する必要が出てくる。

新しい機械を入れる。

もっと精度の高い加工を可能にする設備を揃える。

それらは莫大な費用を要したが、未来への投資だと信じて、私は一つ一つ乗り越えていった。

金型は「精度」がすべてだ。

たった 0.02mm の誤差が製品を台無しにする。

そのため、私は夜遅くまで加工機の前に立ち、寸法を測り直し、刃物の微調整を繰り返した。

時には徹夜で作業を続け、夜明けの空を見ながら帰宅することもあった。

そんな日々の中で技術は磨かれ、工場は少しずつ力を増していった。

金型づくりは、職人の心そのもの。

妥協しない姿勢が、精度と信頼を高めていく。

3. 海外視察：サンフランシスコからアメリカ 4 週間の旅

やがて私は、もっと広い視野で“ものづくり”を見たいと考えるようになった。

そんな時、ある取引先からアメリカ視察への誘いが舞い込んだ。

行き先はサンフランシスコ。
そこからアメリカ本土を四週間かけて巡る旅だった。

初めての海外。
海を越え、広大な土地に降り立った時、そのスケールの違いに圧倒された。

工場も、道路も、街の人の体格までもが日本とは違う。
製造業の設備一つを見ても、日本とは考え方が異なり、
“規模で勝負する”アメリカと、“精度で勝負する”日本の違いを肌で感じた。

この旅で、私は確信した。

「日本の金型技術は世界で戦える」

ものづくりへの誇りが、さらに強くなった瞬間だった。

4. 世界に触れたことで広がった視野

アメリカで見たものは、それまでの自分の常識を大きく揺さぶった。
機械の使い方、工場の運営、人々の働き方、街の空気——
すべてが新しく、刺激的だった。

「これからの時代、日本の職人は、もっと世界を見なければならない」
そう思うようになった。

金型の精度を磨くことも大事だが、視野を広げることも同じくらい重要だ。
もし海外を知らなければ、技術は井戸の中で閉じてしまう。

アメリカで得た刺激は、私の人生の指針となった。
その後の仕事の決断や工場の方針にも影響を与えていく。

5. 家族旅行 ― ハワイ、グランドキャニオン、ラスベガス

海外視察で世界に触れた喜びを、今度は家族にも見せたい。
そう思い立ち、私は妻と子どもたちを連れてアメリカ旅行へ出た。

ハワイの青い海、グランドキャニオンの大地の裂け目、ラスベガスのきらびやかな
夜景――

どれもが、小さな日本の工場で働く日々とは対照的な、圧倒的な世界だった。

子どもたちが目を輝かせて景色を見る後ろ姿を、私は忘れない。

「また頑張れば、必ず良い未来が見られる」
そう伝えたかった。

家族との旅は、私にとっても大きな励みとなり、
その景色のひとつ一つが、仕事への情熱を支えてくれた。

6. 社員寮兼自社ビルの建設と苦労

仕事が増え、社員も増えた。

そこで私は、従業員が安心して暮らせるようにと、社員寮を兼ねた自社ビルを建てることを決断した。

しかし、その道のりは容易ではなかった。

土地選び、設計、建築会社との交渉、費用の捻出――
どれも初めての経験で、迷うことや悩むことばかりだった。

家族から「そんなに背負って大丈夫か」と心配されることもあった。
だが私は、
「人を雇うなら、その生活も守らねばならない」
という信念で動いていた。

完成したビルは、三階までが工場、上階が住居となり、社員に貸し出す“住まい”としても機能した。

しかし、住居にした以上、生活音や工場の音による苦情もあった。時には「もっと別の建て方をすれば良かったか」と後悔することもあった。

それでも、社員が安心できる場所を用意できたことは、自分にとって大きな達成であり、誇りでもあった。

第六章 責任と信頼 ― 経営者としての覚悟

1. 子育てと取引先への信用構築

家庭を持ち、子どもが生まれると、私の毎日はさらに慌ただしくなった。しかし、それは決して苦ではなかった。むしろ、守るものが増えたことで、仕事への責任感はより強いものとなった。

子どもたちが成長していく姿を見ながら、私は心の中でこう誓った。
「この子たちに苦勞を背負わせないためにも、仕事を決して絶やしてはいけない。」

そのためには、取引先との信用が何よりも重要だった。納期を守ること、責任を持って仕上げること、約束を違えないこと。この三つは、どれだけ忙しくても絶対に譲れなかった。

ある取引先の社長は、私にこう言った。

「あなたは口数が少ないけど、仕事でちゃんと返してくれる。」

その一言が、何より嬉しかった。
信用とは、言葉ではなく“積み重ねた行動”で築くものだと、改めて実感した瞬間だった。

2. 徹夜作業と夜明けの街、助手席で眠る妻

仕事集中すると、徹夜になることは珍しくなかった。

金型の寸法は誤魔化しがきかない。
一ミリどころか、〇・何ミリの世界。
少しでも焦れば失敗し、やり直しになる。
だから私は、夜遅くまで、ひとつ一つの仕事に向き合った。

そんな夜、よく妻が工場に来てくれた。
差し入れを持ってきてくれたり、ただそばで見守ってくれたり。
疲れた身体に、それは何よりの励みだった。

夜明け前、ようやく仕事が片付くと、私は妻を助手席に乗せ、車で家に戻った。
その途中、妻は決まって静かに眠っていた。
助手席に座る彼女の寝息は、徹夜明けの私にとって、
何よりも温かく、幸せな音だった。

明けていく街。
薄暗い空が少しずつ白み始める瞬間——
私は「また頑張れる」と心から思った。

3. 苦勞を知らぬ子どもたちへ「背中で教える」

子どもたちは、私の仕事の苦勞を深くは知らなかったと思う。
夜中に帰り、朝早く出て行く父の姿を、ただ当たり前の光景として見ていただろう。

しかし、それでよかった。

「苦労は子どもに見せるものではない。背中では教えるものだ。」

私はそう信じていた。

時には叱ったこともある。

時には寂しい思いをさせたかもしれない。

それでも、私は家族のために働く姿を、
何よりも大事な「父の背中」として残したかった。

子どもたちが大人になり、

「お父さんはいつも働いていたけど、嫌そうな顔はしていなかった」
と言ってくれた時、私は胸が熱くなった。

働くことの意味は、言葉ではなく日々の姿で伝わるのだ。

4. 苦情対応、舎人親水公園への工場移転

金型の仕事が増え、工場を拡張したことで、新たな悩みも生まれた。
「騒音問題」である。

昼は問題なくても、夜に機械を回すと、周囲の家から苦情が来るようになった。
当時は住宅も増え、地域の環境も変わりつつあった。

私はどうすべきか何度も悩んだ。

その結果、家族に相談し、反対意見も多くある中、
舎人親水公園のそばへ工場を移転する決意をした。

この決断には、家族からも「急ぎすぎではないか」と心配の声があった。
土地も狭くなり、モノレール工事の影響もあり、簡単ではなかった。

しかし、私は

「周囲の環境に迷惑をかけず、仕事を続ける」

この一点で決断した。

結果として家賃収入で維持できるようになり、
従業員のための住まいも提供できた。

完璧ではなかったかもしれない。
だが、前へ進むために必要な選択だったと、今では思っている。

5. 中小企業の現実と経営の重さ

中小企業の経営は、華やかさとは無縁である。
資金繰り、設備投資、人材育成、そして納期——
どれひとつ欠けても会社は続かない。

景気の波に振り回され、
時には注文が一気に減り、
時には大きな仕事が舞い込む。
経営者の心は、常にジェットコースターのようなものだ。

だが、それでも私は金型の仕事を続けた。
“ものづくりには嘘がない”
その信念があったからだ。

そして、何より支えとなったのは、
妻の存在、家族の笑顔、そして従業員の努力だった。

「人を雇うということは、その家族の人生も背負うということ」
この重さを噛みしめながら、私は毎日工場に立った。

苦しい時も、
嬉しい時も、
すべてを引き受けて前に進む。

それが、あの頃の私の“経営者としての覚悟”だった。

第七章 熟成の時代 ― 家族の絆と社会への奉仕

1. 親族旅行で深まる家族の結束

子どもたちが成長し、家業も安定しはじめると、私は「家族や親族との時間」をより大切にするようになった。

妻には六人の兄弟がいて、その家族が年々増えていく。親族が集まると、子どもたちの声、笑い声、料理の匂い――まるで一つの大きな家族のような賑やかさだった。

ある時、思い切って皆を連れての親族旅行を企画した。車に乗り、何台もの車列で移動し、夕食の席では大人たちが近況を語り合い、子どもたちは宿の廊下を走り回っていた。

私は、その光景を眺めながら、「家族とは、血だけでなく時間と経験で結ばれていくものだ」と感じていた。

仕事でどれほど苦しい時期でも、こうした家族の笑顔と団結が、心を支えてくれた。

2. ロータリークラブへの入会(60 歳)

60 歳を迎えた頃、私はロータリークラブに入会した。それは、単なる社交の場ではなかった。「奉仕の精神」を学び、社会と繋がり、地域の仲間と支え合う場所でもあった。

若い頃は「奉仕活動」という言葉に実感が湧かなかったが、年齢を重ねるにつれて見える景色は変わる。

人生は、
「受け取る」から「与える」へと変わっていくものなのだ
と気づいたのは、この頃だった。

クラブでは、経営者や専門職の仲間たちと語り合い、
仕事だけでは得られない知恵や刺激を受けた。

会合の場での一つ一つの言葉が、
私の人生の深さを広げてくれたように思う。

3. 奉仕活動と国際大会で得た経験

ロータリーでは地域奉仕だけでなく、
世界の人々を支える活動 に参加する機会もあった。

国際大会に参加し、世界中から集まった人々と交流した時、
私は改めて「国の違いより、人の優しさの方が大きい」ということを感じた。

アメリカ、カンボジア、ベトナム……
どの国のロータリアンも、目の前の誰かを助けようとする心を持っていた。

戦後の日本で育った私は、
世界の広さを肌で感じ、
「自分たちは恵まれている」
ということも痛感した。

貧しい国の子どもたちが笑顔で手を振ってくれと、
胸が熱くなった。

4. インドネシア視察での迷子事件

そんな中でも、特に印象深いのがインドネシア視察の時の出来事だ。

同行したのは荒川区長や経営者仲間たち。
ジャカルタの巨大ショッピングモールを視察し、
人の多さと広さに驚きながら歩いているうちに——
私は気づけば道に迷っていた。

どこをどう歩いたのか見当もつかない。
英語も片言で、店員に説明するにも言葉が足りない。

それでも、なんとか言葉を繋ぎ、身振り手振りで状況を伝え、
出口へ向かう途中——
なんと、偶然にも荒川区長と再会した。

お互い思わず笑ってしまい、
緊張していた心がほどけた。

今思えば、あの出来事は
「人生、深刻になりすぎるな」
と教えてくれた小さなハプニングだった。

5. 「男は世に出れば七人の敵」の実感

年齢を重ねるほど、父の言葉の意味が身に染みる。

「男は世に出りゃ、七人の敵がいる」

若い頃は大げさだと思っていたが、
経営者として数十年歩んできた今では、
この言葉の深さがよく分かる。

利益だけでなく、人間関係、競争、責任、誤解——
世の中には思わぬ“敵”が潜んでいる。

だが同時に、
「七人の味方」もまた必ずいる。

家族、従業員、取引先、友人、地域の仲間——
人生の支えは、苦難の数以上に存在する。

敵を恐れるより、
味方を大事にする方が、人生はずっと明るい。

そう教えてくれたのが、この時期の経験だった。

6. 地域活動「荒川をよくする会」への参加

私は地元・荒川区を愛している。
戦後の暗い夜道を知り、
工場が立ち並ぶ下町の時代を知り、
再開発で徐々に生まれ変わっていく姿も見てきた。

そんな思いから、区長が主催する
「荒川をよくする会」
にも参加するようになった。

この会では、地域の課題を話し合い、
どうすれば荒川がもっと住みやすい街になるかを議論した。

荒川は収入が多い区ではないが、
「貧しい人を助ける区であれ」
という姿勢が根づいている。

私はその考えに共感し、微力ながら協力を続けた。

高齢になってからは体調の問題もあり、
毎回は参加できなくなったが、
地域を良くしようとする人々の思いは、
今でも心に深く残っている。

第八章 技術の魂 — 信頼に応える開発と特許

1. 接着不良で危険を抱えた製品改良の依頼

ある日、長く付き合いのある会社から深刻な相談が舞い込んだ。
それは、製品の“羽根”に関する問題だった。

本来は接着で二枚の羽根を組み立てる構造なのだが、
使用時に接着が剥がれ、思わぬ事故が起きかねない。
“危険を伴う製品”としてクレームが数件届き、
担当者は沈んだ表情で私に頭を下げた。

「どうにかできませんか。
このままでは信用問題で倒れてしまう。」

私はその時、技術者としての血が騒ぐのを感じた。
問題を抱えて苦しんでいる相手を前にすると、
「できません」とは言えない性分だった。

「任せてください。必ず解決しましょう。」

その一言が、私自身を大きな挑戦の渦へと誘った。

2. 「一体成形」という至難の技への挑戦

接着不良を根本から解決するには、
「接着そのものをなくしてしまう」しかなかった。

つまり——
羽根を“1枚の金属”から削り出す“一体成形”を作る。

これは常識外れの発想だった。
加工の難易度は跳ね上がり、精度は十倍求められる。
工場の設備も、スタッフの技術も、
すべて限界まで引き上げなければ成功しない。

夜遅く、図面の前で頭を抱えたこともあった。
試作品は何度も失敗した。
社員が疲れた顔で「本当にできるんですかね……」と呟いたこともある。

それでも私は言い続けた。

「必ずできる。技術は嘘をつかない。」

“信頼に応える”
その思いが技術者のエンジンとなっていた。

3. 社員とともに達成した“成せば成る”の瞬間

挑戦から数カ月。
膨大な試作と調整を経て、ついに“一体成形の羽根”が完成した。

社員総出で仮組みし、試運転スイッチを押した時、
私は息を呑んだ。

音が軽い。
振動が小さい。
風量が安定している。

何より、問題だった“接着の剥離”という概念が、完全に消えていた。

社員から歓声が上がった。
目に涙を浮かべる者もいた。

苦勞して、苦しんで、諦めずに挑んだ末に、
初めて見る景色があった。

「成せば成る」——その言葉を、人生で初めて本当の意味で理解した瞬間だった。

4. 経産省製造業局長賞受賞

この開発は業界でも話題になり、
後に私は **経済産業省 製造業局長賞** を受賞した。

授賞式の日、
私はずっと支えてくれた社員たち、
そして苦情に悩みながらも信じて仕事を預けてくれた取引先の顔を思い浮かべた。

技術とは数字や図面の集合体ではない。
困っている人を助けたいという“義侠心”が支えるものなのだ。

5. ファスクバーナー小松で採用された画期的なファン

“一体成形羽根”の技術は、やがて大手企業から注目されるようになる。

その中には、
ファスクバーナー小松 (Husqvarna Komatsu)
という合弁会社もあった。

彼らは草刈り機や電動工具の世界的メーカーであり、
「軽量で高耐久なファン」を求めている。

試作品を提出したところ、
技術部門の担当者は驚いたように言った。

「この薄さで、この強度……どうやって作ったんですか？」

技術が認められた瞬間だった。

その採用は、我が社にとって大きな転機となり、
“ものづくりの質で勝負する会社”としての信頼が確立されていった。

6. TOTO・東芝・日産・レクサス・キャデラックへの挑戦

開発力が評価されるにつれ、
次々と新しい依頼が舞い込んだ。

TOTO のエアータオル用ファン。
東芝の家電部品。
日産やトヨタ、レクサス向けのモーター部品。
さらにはキャデラック向けの試作品まで。

いずれも大手メーカーで、基準は厳しく、試験は容赦がなかった。

特に日産は評価基準が厳しく、
レクサスはわずかな誤差も許さない。
キャデラックはアメリカ車ならではの独自仕様。

しかし私はその挑戦を喜びとして受け止めた。
難しい仕事であればあるほど、技術屋は燃える。

そして何より——
「中小の町工場でも、技術で世界の大手に勝負できる」
この事実が私を勇気づけてくれた。

7. 「義侠心」が技術を動かす

振り返れば、私の技術者人生を動かしてきたのは、
“儲け”や“名誉”ではなかった。

困っている人を助けたい。
失敗して落ち込んでいる担当者を支えたい。
社員が誇れる仕事がしたい。

そんな、少し古臭いかもしれない
「義侠心」
こそが、技術を磨き、会社を動かしてくれた。

ものづくりとは、
結局のところ“心”が作るものなのだと、
私は今でも信じている。

第九章 創造と継承 — 厳しい市場で生き残る工夫

1. EV 時代・国際競争時代の不安

時代は常に変わる。
日本が高度経済成長で勢いを増していた頃、
金型の需要は右肩上がりで、
その流れに乗って工場も順調に成長していった。

しかし、21 世紀に入り世界は一変した。

自動車産業は EV へと急速に移り変わり、
多くの部品が簡素化され、金型の需要も変動し始めた。
それに加え、海外メーカーの品質が飛躍的に向上し、
韓国・台湾・東南アジアが強力な競争相手となった。

私も当初は、
「ファンも、車のマークも、EV 時代でも影響は少ないだろう」
と考えていた。

だが、現実には甘くなかった。

為替、関税、生産調整——
一つの変化が小さな町工場に大きく響く。

生産台数が落ちれば、部品単価を下げざるを得ない。
取引先が減れば、工場の稼働率も落ちる。
長年会社を支えてきた技術者たちの生活も守らなければならない。

経営者として、
「これからの時代、どう戦うべきか」
という不安が日々胸に押し寄せてきた。

2. プラスチック製品の変遷と海外製品との競争

父が始めたプラスチック成形は、
かつては“日本の便利生活”を支える主役であった。

しかし海外製品の品質が向上し、
大量に安価な商品が日本に入ってくるようになると、
中小の町工場は価格競争に巻き込まれた。

私も若い頃は、
「日本の技術で十分に勝てる」
と信じていた。

だが、海外勢が高品質・低価格を実現してくると、
両手放しではられない。

技術、スピード、コスト——
そのすべてが問われる時代に突入した。

だからこそ、私は設備投資を惜しまず、
加工精度の向上、生産効率の改善、
社員教育の充実に力を注いだ。

「勝てるところで戦う」
これが町工場が生き残る唯一の道だった。

3. 「転んでも只では起きぬ」経営者の心

経営者には、必ず“転ぶ瞬間”がある。

新技術の導入で失敗したり、
思わぬクレームを受けたり、
時代の変化に追いつけず焦ることもあった。

しかし私は、
「転んでも只では起きぬ」
という気持ちを常に持っていた。

失敗したら、必ず何かを掴んで立ち上がる。
失敗の原因を分析し、次の成功の糧にする。
その積み重ねが、技術と会社の底力を作っていく。

成功の裏には必ず無数の失敗がある。
“成功は失敗の母”
という言葉を、私は実体験として胸に刻んでいる。

4. 新製品技術大賞(荒川区長表彰)受賞

そんな折、私たちが開発したある製品が高く評価され、
「第3回 新製品技術大賞(荒川区長賞)」を受賞した。

技術は大企業が作るものだけではない。
町工場でも、アイデアと努力しだいで
“地域を代表する技術”になり得る。

この受賞は、私だけでなく、
長年一緒に苦労を重ねてきた社員たちにとっても大きな誇りになった。

表彰状を手にした時、
私は心の中で父に語りかけた。

「あなたが始めたものづくりの道は、今も息づいています。」

5. 三代目への継承とその難しさ

経営者としての私の役割も、やがて“継承”へと移っていく。

台頭する海外企業、先細る国内市場、
技術の高度化、EV 化、環境規制——
三代目は、私の世代よりもさらに厳しい時代を歩むことになる。

私は時々こう思う。

「私が若い頃の方が、まだ時代に余裕があった。」

今の時代は、技術だけでは生き残れない。
IT、ロボット、自動化、マーケティング——
すべてを組み合わせねば勝負できない。

だからこそ、私は息子に伝えたい。

「時代は変わる。しかし、誠意と努力はいつの時代も通用する。」

継承とは、技術だけを渡すことではない。
“生き方”そのものを渡すことだ。

6. 樹脂リサイクルという未来への責任

近年、プラスチック廃棄物が世界的な問題となっている。
私もこの現状を深刻に受け止めている。

かつては価値ある製品だったプラスチックが、
今では廃棄物として大量に日本へ流入し、
その多くが性質不明で再生が難しい。

しかし私は、樹脂の成形を知り尽くした立場として思う。

「樹脂は正しく扱えば、もう一度生まれ変わる。」

材料を見分け、混ざらないように管理し、
用途に応じて再加工する——
この分野には、町工場の経験と知識が生きる。

リサイクルは、
“未来の子どもたちへの責任”
であり、
“ものづくりの心”を次世代へ繋ぐ取り組みでもある。

私は、樹脂リサイクルという新しい道に、
ものづくりの未来を託したいと考えている。

第十章 米寿を迎えて — 人は世につれ、世は人につれ

1. 妻の内助の功と家族の絆

八十八年という歳月を振り返る時、
真っ先に思い浮かぶのは、長く支えてくれた妻の姿である。

工場で徹夜が続く日も、
私が黙々と機械に向かう背中を、
妻は責めることなく、ただ見守ってくれた。

時に差し入れを持ち、
時に助手席で眠りながら帰路を共にし、
その何気ない存在が、どれほど私の心を軽くしたことか。

夫婦は互いを支えるもの——その意味を、人生の全てで教えてくれた人である。

2. 四人の子どもの誠実さが家系の柱となる

四人の子どもたちが、それぞれ誠実に人生を歩み、
互いに助け合い、支え合い、強い絆を育ててくれたこと。

これは、会社の受賞歴よりも、技術の成果よりも、
私にとって何より誇らしい“家系の柱”である。

子どもたちの誠実さは、
私たち夫婦が築いてきた時間の証でもあり、
この家に流れる「正直に生きる」という精神が
静かに息づいている証でもある。

3. 孫の可愛さ、晩年の穏やかな喜び

孫の存在は、人生のご褒美である。
どの子も可愛く、元気で、明るい。

私が若い頃には想像もできなかった
“二世代、三世代の幸福”という景色を、

晩年にこうして味わえることは、
人生の幸せの中でもひとときわ輝いている。

家族が笑ってくれるだけで、
胸の奥がじんわりと温かくなる。
年齢を重ねて知る、静かで深い喜びである。

4. 「灯火を絶やさず歩む」人生観

戦争、疎開、空襲、父の事故、経営の苦労……
人生は決して平坦ではなかった。

しかし、私はいつも
「灯火を絶やさず歩む」
という心を失わずに生きてきた。

どれほど暗い夜道でも、
小さな灯りさえあれば歩き続けられる。
そして、歩き続ければ必ず暁は訪れる。

この人生観は、戦中戦後を生きた世代だからこそ得られた
大切な財産だと思っている。

5. 90 歳まで働き続けた姿勢

気がつけば、私は九十歳まで仕事を続けていた。
特別な秘訣があったわけではない。
ただ、ものづくりが好きで、工場が好きで、
働くことが人生の一部になっていただけのことだ。

技術を磨くこと、
信頼を守ること、
人に喜んでもらえるものを作ること。

その積み重ねが、私の生きる力となっていた。

6. 「幸福は人間の力で築くもの」

米寿を迎えた今、私が確信していることがある。

幸福は、人間の力で築くものだ。

運や偶然に頼っていては、幸せは遠ざかる。

努力し、誠意を尽くし、人を大事にしてこそ、

幸福は自らの手で作り上げていける。

家族を愛し、仕事に誇りを持ち、

今日を一生懸命積み重ねていく——

それこそが、私の辿り着いた人生の結論である。

終章 後世への手紙 — 技術と誠意を未来へ

1. 家業は人を育て、人は家業を育てる

私は金型という仕事を通して、

家業とは単に「会社を継ぐ」ことではなく、

“人を育てる場であり、人が育ててきた歴史そのもの”

であると知った。

技術を磨けば人間も磨かれ、

誠実に働けば信頼が積み、

信頼が次の仕事と人を呼んでくる。

家業とは、そうやって代々の時間を重ねながら、
ゆっくりと成長していくものなのだ。

2. 技術と誠意を未来へ

未来の世代へ伝えたいことは多くない。
ただ、この二つだけは忘れないでほしい。

「技術」と「誠意」

技術は道具であり、誠意は心。
どちらが欠けても、人の役には立てない。

困っている人を助ける技術者であってほしい。
誠意あるものづくりができる人間であってほしい。

時代は変わっても、
AI が進歩しても、
どんな機械ができて——

人の心だけは、未来を支える最後のつくり手である。

結びに

私が歩んだ八十八年は、
決して特別なものではないかもしれない。

しかし、家族を愛し、仕事に誠実であり、
灯火を消さず歩き続けた人生であったと胸を張って言える。

どうか未来の家族たちが、
この生き方のどこか一つでも受け取り、
自分らしい人生を築いてくれることを願っている。

あなたたちの人生に、幸多かれ。